

Some Tips for Teaching a Big Class - Focusing on Group Activities

中山 千佐子

1. はじめに

Cross Cultural Communication (CCC) は、文化の重要概念を学び、文化とは何か、ということについて英語で話し合うクラスである。立教大学英语カリキュラム言語文化コースのコアをなす重要な必修科目のひとつであるが、このクラスの教え方に頭を悩ませる担当者は多い。原因は、高度な授業内容を学生の限られた英語能力で理解させ、論じさせることの難しさにある。しかも、このクラスの定員は最大48人である。それだけの数の学生を英語だけで行なわれる難解な内容の授業に90分間集中させ参加させるのは容易ではない。特に、英語レベルのあまり高くないクラスや、モチベーションの低い学生の多いクラスの場合はなおさらである。

筆者は99年度後期からこの科目を担当してきたが、最初の1年半は様々な問題に直面した。大人数の教室で学生に多くの授業参加の機会を与える為に、グループワークを採用してきたが、学生の自主性を尊重する為にグループ分けを毎回学生に任せていたことが裏目に出て、緊張感に欠け、日本語でのおしゃべりが目立つことがたびたびであった。従って、ディスカッションの結果を聞いても、満足な答えが得られないこともあった。又、どのグループにも参加せず孤立してしまう学生も時々みられた。さらに、週1回の授業で全ての学生の名前を覚えることは容易でなく従って、成績の30%を占めることになっている平常点をつけるのも困難であった。

そこで、2001年度前期に担当した2クラスでは、授業運営の方法に様々な工夫を加えてみた。以下は、試行錯誤の末に筆者が編み出した「40人を超えるクラスでも教師が学生の顔と名前を把握し、全ての学生を授業に参加させる方法」である。この方法は、グループ活動を伴うどんなクラスにも応用できると思う。

2. 授業の進め方

- 1) まず、初日に出席簿順に学生を5人ずつのグループに分け、グループ毎に全学生の写真を撮る。学生は、常にこのグループ毎に着席する。(公平を期して教室内の座る位置は毎週入れ替える。) この写真入り出席表が手元があれば、学生の名前と顔を一致させることは容易であり、出席を取る時間も大幅に短縮できる。
- 2) 第2週から学生は各グループで与えられた課題を行なう。ここでのポイントは、あらかじめ各週のグループリーダーを決めておくこと。リーダーの役割は、i) グ

ループディスカッションをリードすること、グループワークの結果を英語で ii) 口頭でクラスに発表する、iii) 文章にして教師に提出することの3点である。

3) 教師は、授業中各リーダーのパフォーマンスを観察し、彼らの平常点を採点する。40名を超える学生全員の平常点を毎回チェックすることは物理的に不可能だが、この方法なら毎回9人程度の学生に焦点を当てればよいので簡単である。もちろん、余裕があれば他の学生のパフォーマンスもチェックする。

4) リーダーが一巡する第6週目に、今度はくじ引きでグループ替えをする。これは、自然に生じてしまうグループ間の格差を是正するために必須である。

3. 結果

上記の方法は、非常に良い結果を生み出した。まず、あらかじめグループを決めることによって、孤立する学生がいなくなった。次に、リーダー制を取ることによって、効率的にグループワークが行なわれた。リーダーになった学生は、自分の役割を十分認識し、又、他のメンバーにも協力心が生まれ、積極的にリーダーを助けるようになった。さらに、教師が全学生の名前と顔を把握しているという事実は学生に緊張感を与え、授業に無関係なおしゃべりは減り、眠っている学生は皆無になった。最終日に、授業運営についてのアンケートを行なったが、2クラス87名の回答者の中で、リーダー制について好意的な意見を述べた学生は80名、リーダーやグループの決め方についての賛成意見は81名であった。

4. 考察

この方法が成功した鍵は、日本人の特性を考慮したことにあると思う。日本人学生は、クラスで自分だけとびぬけることを嫌う。学期の始めには積極的に発言していた学生が、「またあいつか」と思われることを怖がっていつのまにか手をあげなくなってしまうのを見るのは本当に残念である。学生のアンケートからわかったことだが、彼らは自分がリーダーという役割を与えられればイニシアティブを取ることを正当化できるのである。又、消極的で普段は自分から手を挙げられない学生も、半ば強制的に役割を与えられれば、思いきって英語で発言できるのだ。

結論として、日本人学生には、教師によるある程度のコントロールが必要なのではないかと思う。アメリカの大学院で90年代に英語教授法を学んだ身としては、学生の自主性尊重の大切さは十分承知している。しかし、日本の教室にそれをそのまま当てはめるのは無理の様だ。学生の自主性の尊重と教師による教室運営の適度な管理、このふたつをいかに上手に両立させていくかが今後の課題である。